

## 記憶障害を持って人と共に生きること

青木美和子 北海道大学大学院教育学研究科  
Miwako Aoki Graduate School of Education, Hokkaido University

### 要約

本研究は、記憶に障害を持つ高次脳機能障害者が生活の場において現在（いま）をどのように生きているのかをフィールドワークによって明らかにしようと試みたものである。ある作業所に通う、記憶に障害を持つ高次脳機能障害者3人の行為から記憶のありようを見ていくことにより、生活の場において記憶障害がどのように現れるのかを分析した。これを通して、高次脳機能障害者が自分の記憶障害をどのように経験しているのか、そして周りの人々と共にどのような生活世界を作り上げ生きているのかの検討を行なった。メンバーの記憶障害の特徴は、過去のある時間の記憶がなくなること、記憶を想起できてもその一部が欠落してしまうこと、行為に必要な記憶をタイミングよくまとまりのあるものとして想起できないこと、記憶を想起できるまでに時間がかかることなどである。しかし、これはいつもではなく、「時折」であった。また、作業所では、メンバーとスタッフが作り出した「システム」によって記憶障害が見えにくくされていた。高次脳機能障害は、外見から障害がわかりにくいという意味で「見えない障害」と言われてきたが、当事者とそれを援助する人との関係によっても「見えない障害」になることが考察された。

### キーワード

高次脳機能障害、記憶障害、行為、ベルクソン

### Title

**How Do People with Memory Disorders Manage to Get along with Other Persons?**

### Abstract

The purpose of this study was to examine how people with memory disorders get by in everyday life. The researcher collected data through fieldwork. The informants were three men who had sustained higher brain dysfunction and memory disorders for extended periods. The characteristics of their memory defects can be divided into four categories; 1) They have the past that they can never recall. 2) They suffer from partial memory loss. 3) They cannot place a given memory within the proper time frame of occurrence. 4) It takes a long time for them to recall a given memory. However, these individuals do not suffer from such memory defects all the time. Under the system which the staffs and members of community disability services have created it could be easy to overlook such memory defects at times.

### Key words

higher brain dysfunction, memory disorder, action, Bergson

|     |
|-----|
| 問 題 |
|-----|

## はじめに

本研究では、記憶に障害を持つ高次脳機能障害者が生活の場において現在（いま）をどのように生きているのかを明らかにしようと試みた。フィールドワークの手法を用い、生活の場で高次脳機能障害者の記憶障害がどのように現れるのかを分析し、これを通して、高次脳機能障害者が自分の記憶障害をどのように経験しているのか、そしてさらには、彼らは記憶障害を持ちながらもまわりの人々と共にどのような生活世界を作り上げ、現在を生きているのかを明らかにすることを目的とした。

高次脳機能障害とは、事故などによる外傷性脳損傷や脳血管障害などの器質的病変の後遺症としての記憶障害（前向き健忘および逆行性健忘など）、注意障害（集中困難、注意散漫、半側空間無視など）、遂行機能障害（目的に合った行動計画・及び行動の実行障害）、社会的行動障害（意欲・発動性の低下、情動コントロールの障害、対人関係の障害、依存的行動、固執）などの認知障害をさしている。また、高次脳機能障害者はこのような認知障害があるため日常生活や社会的生活に制約を受けることが多い（国立身体障害者リハビリテーションセンター、2004）。

高次脳機能障害は外見からわかりにくく、他人に認識されにくいこと（生駒、2004）などから「見えない障害」であるとよく言われる。高次脳機能障害者は「運動能力があり、日常生活動作などは比較的保たれており、また会話では異常を認められないこともあるにも関わらず、社会生活をする時に適応障害が認められる。一見すると異常がないため、家族の理解、学校や職場での理解は充分ではない。」（眞野、2003）と指摘されている。

2005年、高次脳機能障害について厚生労働省は初めて診断基準を設ける方針を決めた。同省の推計によると全国に高次脳機能障害者は30万人いるとみられるがこれまで明確な診断基準がなく、障害者として認定されないことが多かった（朝日新聞、2005）。現在、

この障害に対する理解、および適切に援助できる体制が整備されることが望まれている。

## 1 なぜ高次脳機能障害者の生活の場をフィールドとするのか

これまで高次脳機能障害に対して認知リハビリテーションが行なわれてきた。認知リハビリテーションの目標は脳損傷に起因する機能障害を訓練によって回復に導き、ひいては日常生活、社会レベルの能力障害を軽減していくことを目標とする。しかしながら、認知リハビリテーションの効果を科学的にまたは臨床的に実証することは難しいと言われ（矢崎・三村、2005）、受傷後1年以上経過してからリハビリテーションを受けても成果が得られにくいということも指摘されている（生駒、2005）。また、事故後の急性期における医療機関による積極的な治療やリハビリテーションが終了すると、その後の医療・福祉プログラムの脆弱さから多くの高次脳機能障害者は障害が回復、軽減しないまま日常生活の場に戻る事が多いとされる（大村、2004）。この「医学モデル」によるリハビリテーションでは、その効果、リハビリテーションの継続には限界が指摘されながらも、失われた機能や能力障害の回復や軽減を目的として行なわれてきた。したがって、日常生活の場で高次脳機能障害者は残存されている能力をいかに使って生活をしているのか、そしてまた、日常生活の場でどのように高次脳機能障害があらわれているかということに注目することはこれまでなかった。高次脳機能障害を持つ人を生活の場に帰すことがリハビリテーションの目的であるならば、その人の障害を病院やリハビリテーション施設などの限られた環境の中でのみ捉えるのではなく、本来あるべき生活の場の中で捉え、その中で障害を理解するようにすべきである。そして重要なのは、高次脳機能障害者が環境の提示する全体的な文脈をいかに捉え、その文脈にあわせて、いかに自己を実現しようとしているのかという視点である（山鳥・鎌倉、2005）。

現在、地域リハビリテーションやソーシャルワークにおいて従来の「医学モデル」から「生活モデル」への転換がはかられている。「生活モデル」によるリハビリテーションは、まず障害者の日常生活の場に目を

向け、疾病や障害に焦点を当て機能の回復や症状の軽減をしていくことで社会復帰を目指すだけでなく、当事者本人や家族を全体として捉えて「生活のしづらさ」の改善を目標とするものである。その目的は、障害者の主体的な生活の獲得と自己実現に向けられる（大村，2004）。限られた環境としての医療機関の中だけでリハビリテーションをするのではなく、すでに持っている力、残された能力を使い、地域社会においてどのように人との関係を作りながら社会参加し、自分らしく生きていくのかという視点が新たにリハビリテーションに導入され、それを支援する場が現在必要とされている。

これらの議論を踏まえ、生活の場で高次脳機能障害者の記憶障害が具体的にどのように現れるのかを見るということ、そして、その一方で、彼らが障害を持ちながらも、今ある力を使い、どのように人との関係を作り生活をしているのかという視点を持つこと、そしてそれをフィールドワークによって明らかにしていくことは医学的にも社会的にもそして、今後の支援を考えていくためにも意義があると考えられる。

## 2 「経験」として障害を捉える

ヴィゴツキー (Vygotsky, 1924/1982) によると、障害は一次的障害（生物学的基礎を有する障害）と二次的障害（一次的障害を基礎として社会的環境の中で生じる障害）からなるという。彼は、盲人を例にあげ「心理学的事実としての盲は、盲人自身にとってはまったく存在しない」(p.19)、「盲は盲児にとって正常な状態であって、病的な状態ではない。盲は盲児には、自分に反映される社会的結果として、間接的に、二次的にのみ感じられる」(p.20)と述べた。つまり、盲という機能障害、「見えない」という能力障害を、盲人自身が盲を障害であると「経験する」のは二次的障害としてであり、それは社会的な環境の中で経験されるものである。要するに、障害が障害として外面化するの是一次的障害だけで説明できるのではなく、どのような障害者へのサポートが用意されているかということでも決まってくる。もちろん一次的障害そのものが変わるわけではないが、二次的障害は個人と社会との関係の中で生じる。

また、上農（2003）は、障害を固定的、実体的な「もの」とは捉えずに関係概念的な現象、つまり、出来事＝「こと」として捉えるべきであると言う。身体が持っている機能という実体的属性がありできないことはあるが、その事実を障害とするか否かは社会と個人の意識の中でそれをどのように価値づけをするかということに関わってくる。形成された価値観は、人の行動を支配し、人の世界に対する態度や感じ方を方向付ける。この価値観のもと人は社会の中で障害を経験する。

以上の二つの障害観は、どちらも障害を心身の機能障害や能力障害と捉えるのではなく社会との関係の中で考えていく必要性を主張している。これらの議論をふまえ、本研究では、高次脳機能障害者が日常生活場面でどのように高次脳機能障害を経験しているのかに注目する。

## 3 高次脳機能障害者の「記憶障害」

2001年から厚生労働省により高次脳機能障害の診断基準の確立と支援プログラムの開発を目的とした高次脳機能障害モデル事業が行なわれたが、この事業の中で集積された高次脳機能障害者のデータの集計結果によるとその90%の人が記憶障害を持っている。記憶障害は、一見軽度に見えても日常生活や社会生活、また職業上、さまざまな困難を生じやすい。そのため記憶障害を持つ高次脳機能障害者の社会復帰を難しくしている（前島ら，2002）。したがって、本研究では高次脳機能障害の中でも特に記憶障害に注目することにした。

本研究では、記憶障害をその人の日常生活における現在の行為からみていこうとするがその理由は次のとおりである。

現在、「記憶とは過去経験を保持し後に再現して利用する機能で符号化（記銘）、貯蔵（保持）、検索（想起）の3段階からなる」（森，1999）とする従来の記憶論のもと神経心理学的検査法により記憶障害の評価は行なわれている。この評価は覚えるべき情報をどれだけ貯蔵でき検索し再現できるかという視点で行なわれているが、これでは生活する場において記憶障害がどのような現象として現れるのかは不明のままであり、

俗に言う「記憶力」が問われているにすぎない。

従来の記憶論では記憶の捉え方について少なくとも二つの問題が潜んでいると考える。一つは、記憶を「もの」的に捉える点である。現在に至るまで多くの記憶研究は、記銘、貯蔵、検索できる量やそのメカニズムに探求の焦点をあてて行なってきた。そこでは個体中心主義的な情報処理モデルのもと、記憶は個人内部で貯蔵されるもの、それを入力出力したものとされ、記憶は自然的状況での人間の活動、社会的な文脈から切り離された「もの」のように扱われてきた。つまり、どれだけ覚えられるのか、いかに再現できるかに研究の焦点が置かれ、人間が生活する場においてどのように記憶が関わっているのか、現在を生きる人間にとって記憶が果たす役割は不問のまま、記憶は人間の生とは無関係の「もの」のように扱われてきたのである。

もう一つの問題は、時間の存在の実体化という点である。心理学の研究の多くは、時間軸の存在を前提に行なってきたが、従来の記憶論でも記憶は記銘→保持→再生という時間の時間軸上で考えられ、この意味において過去→現在→未来へと流れる時間は自明なものとされてきた(大橋, 2004)。そこでは、現在を生きる私たちにとって今ここにおける体験として過去や未来がどのように立ち現れるのかは問われることはない。大橋(2004)は、時空間に定位される人間にとって知覚されるのは現在であり、過去と未来は知覚されるものではなく、その存在は過去を「想起する」ないし、未来を「予期する」ということによって立ち現れると言う。したがって、過去→現在→未来という時間の存在を実体化する従来の記憶論では問題が潜んでいることになる。

また、「生態学的妥当性」を重視すべきであるという主張からはじまった日常記憶の研究は、日常場面においていかに記憶が機能しているのかを明らかにしようとしてきた(森, 2001)が、大橋(2004)が指摘するように従来の記憶論の記銘→保持→再生という時間の流れのまま問題を捉えており、従来の記憶研究のパラダイムがそのまま残されている。

人間精神への社会文化的アプローチ(Wertsch, 1998/2002)では、人間精神を主体が外部世界と能動的に関わる行為を分析のユニットにすることで人間精神を個人の内部だけで説明することから抜け出すこと

が可能になると考える。そもそも人間精神は社会的な活動にその起源があり、それは文化的、制度的、そして歴史的な文脈に結びついているとされる。もちろん記憶も人間の精神活動であるので、記憶は社会の中の具体的な文脈の中で生起する行為として見なければならず、したがって、記憶障害も生活の場における行為という観点からみなければならない。

本研究では、フランスの哲学者であるベルクソン(Bergson, 1975/1999a, 1896/1999b)の理論に基づき記憶について検討する。なぜならベルクソンは記憶を従来の心理学の時間軸上ではなく、現在という視点から捉え直し、さらには記憶と行為の関係も視野に入れているので社会文化的アプローチにも通じることになり、その理論は今回の研究のガイドになりうるからである。ベルクソンは生の哲学の中心を担った一人であるが、記憶を人間の生から全く切り離された外的事物とみなし、自分たちの生の営みからいったん分離して分析する自然科学の手法とは異なったかたちで捉えようとした。

ベルクソンは、知覚との関係から記憶とは何かを明らかにしようとする。彼によると知覚は純粋な認識ではなく、現在行ないうる行為、現在起こりつつある行為であるとする。行為は知覚を組み込んでおり、知覚は行為の文脈で捉えなければいけない。そしてその知覚は記憶と切り離しては論じることはできない。私たちが知覚するものには、常に記憶が結びついており、知覚は現在の状況にもっとも有用な記憶を選び出してくる。そうして知覚された対象を過去の経験によって解釈し、私たちにとって行為を意味のあるものとするのである。つまり、私たちは行為する時、記憶の中から現在の行為に有用なものを想起して行為するのである。したがって記憶は行為という視点から見ることができる。ベルクソンは、記憶を「もの」的ではなく「こと」として捉えようとする。

また、ベルクソンにとって記憶とは現在において過去、そして未来をつなぐものである。私たちは、現在という時間において過去を想起し、一方で未来を予想、予定し、未来に行なうことを意図する。つまり、現在において過去そして未来が立ち現れるのは、過去を「想起する」、未来を「予期する」ことによってである。

表1 メンバーの医学的評価

| 仮名 (年齢/性別)        | 人見さん (33/男性)                   | 高井さん (32/男性)                             | 安田さん (27/男性)  |
|-------------------|--------------------------------|--|---|
| 診断名               | 高次脳機能障害                        | 高次脳機能障害                                  | 高次脳機能障害   |
| 現症                | 記憶障害<br>注意力低下など                | 記憶障害<br>注意力低下など                          | 記憶障害<br>注意力低下など   |
| 損傷部位及び<br>画像診断の評価 | 左側頭葉損傷<br>左側・頭頂葉損傷<br>びまん性軸索損傷 | 左側頭葉損傷・脳室拡大<br>左側脳溝拡大/大脳半球萎縮<br>びまん性軸索損傷 | 右側頭葉損傷  |
| 知能検査<br>(WAIS-R)  | FIQ 92<br>VIQ 82<br>PIQ 109    | FIQ 71<br>VIQ 59<br>PIQ 92               | FIQ 85<br>VIQ 74<br>PIQ 108                               |
| 三宅式記憶力検査          | 有意味 9-9-10<br>無意味 0-3-4        | 有意味 3-4-7<br>無意味 0-1-0                   | 論理的記憶・短文即時再生の<br>低下・ベントン視覚記憶検査<br>での記憶低下が認められる<br>(医師の所見) |
| リバーミード行動記憶検査      | 16                             | 14                                       |   |
| 受傷原因              | 交通事故                           | 交通事故                                     | 交通事故  |
| 受傷後の年数            | 12年                            | 17年                                      | 9年  |

本研究では個人の経験、人にとっての過去の出来事に関する記憶を過去記憶、未来に行なうことを予定し、意図する行為の記憶を未来記憶と呼ぶ。これらの記憶は、現在という時間において私たちの行為と関係するものである。私たちが行為をする時には、記憶の中から行為に有用な過去記憶や未来記憶を想起し行為を行なっている。

#### 4 目的

以上のような問題意識から、本研究では以下のことを目的とする。記憶に障害を持つ高次脳機能障害者が日常生活の場においてどのように記憶を想起し行為を行なっているのかを分析し、記憶の障害がどのように現れているのか明らかにする。そして次に高次脳機能障害を持ちながらもまわりの人々と共にどのように生活をしているのかを描き出す。そして、最後に高次脳機能障害者が記憶障害をどのように経験しているのか、そして高次脳機能障害者が記憶障害を持ちながらもまわりの人々と作り上げている生活世界の意味について検討を行なう。

## 方法

### 1 フィールドの概要とインフォーマント

本研究のフィールドは、高次脳機能障害者のための小規模作業所である。作業所の活動は、通常、平日の月曜から金曜、10時から16時までとなっている。作業所でよく行なわれる作業の内容は、石鹸作りや木工、パソコン作業などである。

常時(2003年度)、通所してくるメンバーは3名で、その他、不定期に通所してくるメンバーが数名いる。いずれも20代から40代の男性である。スタッフは当事者であるメンバーの家族たち4名で、作業所の運営に当たっている。この他、ボランティアが常時、作業所に出入りして作業所の活動を手伝っている。本研究でのインフォーマントは、筆者の観察中ほぼ常時、作業所に通所していたメンバーで20代半ばから30代前半の男性3名(それぞれ人見さん、高井さん、安田さん(仮名)とする)である。この3名の医療データは表1のとおりである。受傷直後は意識不明の状態が数

日間続き、意識が回復してからもしばらくの間は高次脳機能障害の症状も重篤であった。しかし、時間がたつにつれ、事故直後の障害像からかなり変化した。3名とも医療機関において、高次脳機能障害と診断され、記憶障害が認められている。一方、日常生活動作は自立しており、受傷後、就労支援を受け就労した経験はあるが、現在は作業所に通所している。

彼らは、ルポルタージュやテレビのドキュメントに出てくるような重篤な高次脳障害を持つわけではない。ルポルタージュやテレビに出てくる高次脳機能障害者たちに比べて作業所に通っている彼らは「軽度」であり、彼らのどこに障害があるのかは容易にはわからない。記憶障害も日常生活においていつも見られるわけではない。本人たちは障害を持っていることを他者から理解されないことが多く、「障害者と見られないから困る」とか「障害は人、様々。だから困るんだよね」と言い自らの高次脳機能障害が他者に理解されることが難しいことに言及することがある。

このことを端的に表す一つのエピソードがある。メンバーの一人、安田さんは、テレビ局から高次脳機能障害についての番組制作のため取材を申し込まれたことがある。この番組のために一ヶ月ほど、安田さんの日常の様子がビデオに記録されることになり、そのビデオの数は200本に及んだという。しかし、安田さんの日常からは、高次脳機能障害といえる様子がわかりにくかったので、大学病院で安田さんの脳画像を写し、さらに記憶力テストを行なっている場面のみをテレビに放映し、安田さんの高次脳機能障害の説明が行なわれた。結局、安田さんの日常を記録した200本に及ぶテープは使われることはなかった。それだけ安田さんの障害は日常生活において「見えない」のである。

## 2 私とインフォーマントとの関わり

2003年の春、筆者はほぼ週一回の割合で、長期の休みなどには集中的に作業所を訪問しボランティア兼調査者として主にメンバーと作業所での活動をともにしてきた。作業所には毎回、ボランティアが数名きていたが、作業所の活動の後方支援やスタッフの作業の手伝いをするのが多くメンバーと一緒に活動することは少なかった。したがって、いつもメンバーと一緒に

にいて活動を共にしている私は、作業所のメンバーと間違われることがたびたびあった。また、メンバーとは年齢が近いこともあって作業所以外でも会うことがあり、食事や買い物に出かけたりすることもあった。また、電話やメールで連絡をとるなどして、お互いにプライベートなことを話したり相談したりすることがある。

## 3 調査の手続き

2003年4月より12月までの全43回、作業所の開始時(10時)から終了時まで参与観察を行なった。筆者はボランティア兼調査者という立場で作業所の活動に参加したが、このことは作業所のスタッフ及びメンバーも了解していた。参与の仕方は一貫して、一人のボランティアとして、メンバーと共に日常の作業所の活動に参加した。

データの取り方は、ミーティングの場面ではできる限りその間の発話を筆記で記録するようにした。しかし、その他の活動において筆者はメンバーと共に活動しており、また、場の雰囲気那不自然になるのを避けるためにメモやビデオなどでの撮影は行なわなかった。そのため帰宅後、記憶をもとにフィールドノーツをつける形をとった。現在では、フィールドで行動観察をする時にはAV機器を利用することが通例であるが、本研究のようなフィールドノーツのみによる事例研究でも、「日誌研究」の長所、すなわち、1)「多種の行動の力動性を保ちつつ明細化しやすくなり、行動の流れやその背景をなす文脈がつかまえることができる」、2)「いつ生起するかわからないが重要な自発的行動を発見し、拾い上げることができる」(やまだ, 1987)といった長所を十分発揮できると判断し、AV機器を利用したデータは用いていない。

## 結果と考察

### 1 生活の場で「見える」記憶障害

本研究では、メンバーたちが作業所で現在において

行為する時どのように過去記憶や未来記憶を想起して行為を行なっているのかを分析した。その結果から、生活の場である作業所においてメンバーたちの記憶障害がどのように現れているのかを、ここでは述べていく。

作業所においてはスタッフがその日の予定を計画し、メンバーに対して細部にわたる指示と支援によって作業所の活動は行なわれている。作業所ではメンバーが独力で何かを計画し活動することはほとんどないが、メンバーは作業所の活動に参加し、何らかの行為を行っている。この限りにおいては、メンバーがスムーズに行為をしているため、彼らの記憶の障害が見えてこない。メンバーの記憶障害が「見える」のは、行為に「何らかの」支障がでてくる時で、それが「いつも」ではなかった。メンバーの記憶障害が「見えた」事例を紹介する。

### (1) 空白になる過去

私たちは過去において自分が経験したことを現在においてすべて想起できる訳ではもちろんない。もし、想起できない過去の自分の写真や映像、あるいはその時に自分が記録したモノなど、その時自分がそこにいたという何らかの痕跡を見せられても、その時の身体感覚、感情の記憶が想起できなければ自分の過去の記憶にリアリティを感じられないのではないだろうか。

過去記憶の中でも個人が個々の場面で体験する出来事の記憶をエピソード記憶というが、浜田(2002)は、このエピソード記憶は、ある時空のなかに「私」の身体がありその身体のある場所から出来事を体験したという身体的な「パースペクティブ性」を帯びていると言う。そしてこの記憶によって私たち個々の生活史が編み出され、私たちの「物語の記憶」となっていくと言う。「物語の記憶」によって私たちは、時間の持続を感じ、人はアイデンティティを支えていくことができるのである。例えば、泥酔状態となりその時の状況を覚えてなく、他者からその時の自分の様子を聞き、それに対しわずかでも「パースペクティブ性」を持ち、あるいは自分の「物語の記憶」の中にその話を重ねることができるのなら「それは自分が経験したことである」という何らかのリアリティを感じることはできるだろう。そもそも、私たちは自分の過去をすべて想起

できないのだが、日常の行為に支障が出ない限り、それに対して特に問題を感じるわけではない。想起できない過去があっても時間の持続を感じることができれば、自分が過去にそこに存在していたというなんらかの「感覚」を持つことができるであろう。

もちろん、メンバーも、私たちと同じように過去において自分が行なった行為を想起できないことがある。しかしながら、メンバーは自分が想起できない過去の経験、自分の様子を人から聞いてもリアリティを感じられずにいることがある。過去との持続を感じられないのである。ここが記憶障害のない人々との違いである。

## エピソード1

### 《背景》

作業所が地域の夏祭りにおでんや焼き鳥、ホットドックなどの屋台を出店した時のエピソードである。その時、メンバーと私は一緒に屋台の「売り子」をしていたのだが、少しでも売上を上げようと屋台に留まらず、お祭り会場に来ているお客のテーブルをまわり注文を受けたり、注文を受けたものを屋台から受け取り配達する仕事をした。夜になりお客の数も増え、私たちの仕事もさらに忙しくなった。安田さんと私は2人1組になって販売することにした。安田さんはお客から注文を受けても特にメモなどをとることはなかった。数回、屋台に戻ってきた時に自分が受けた注文を私に確かめることがあったが、お客からの注文を間違えることはほとんどなかった。2人でお客から注文を受けそれとともに屋台に戻ろうとした時、一人の女性が安田さんに声をかけてきた。

### 《エピソード》

「さっき、おでん3本頼んだの忘れてるでしょ。」と家族と一緒に来ている女性が安田さんに突然声をかけてきた。私と安田さんは2人であるのにその女性は、私の方は一切見ないで言う。私はその女性から注文を受けた覚えはなかった。先ほど少しの間、安田さんが一人で注文を受けていたことがあったので、私はその時に安田さんが受けた注文だったのかと思った。

安田さんは「え？」と言いその女性を見た。しかし事情が飲み込めないような顔をしている。安田さんはそれ以上返答できないでいる。その女性は今度は怒ったように「だいたい前に頼んでしょ？」と再び安田さんに向かって語気を荒げて言う。しかし安田さんは口に手をあてたまま困惑し

た表情をしている。女性の横にいた男性が「もういいでしょ。」と女性をたしなめるが、女性は「覚えていないの？」と続ける。しかし、安田さんは先ほどと同じく困惑した表情のままである。

私は安田さんの横にいてずっと2人の会話を聞いていたのだが、安田さんの表情と対応からは、安田さんがその女性からそもそも注文を受けた事実がないのか、それとも女性が注文したのは事実であり、それを安田さんが忘れたのか判断がつかなかった。女性もそんな安田さんの様子にますます苛立ったのかさらに強い口調で「おでん3つでいくら？」と詰問する。安田さんは、ますます困惑しきった顔で「えっ、え？」と言うがそれ以上言葉が続かない。女性は「わからないの？さっき頼んだじゃない。もういいわ。」とあきらめて言う。ここではじめて安田さんは「すみません。」と言ったが、それは安田さんが今回のクレームに対して自分が適切な応答ができなかったため謝ったのか、あるいは、注文を忘れてしまっただけで申し訳ないと思っただけなのか私は安田さんの様子から判断できなかった。

このエピソードにおいては、最後まで安田さんは女性から注文を受けたのかどうか判断がつかなかった。つまり、女性から注文を受けたという過去の記憶を想起できないし、それが事実であると女性から断言されてもリアリティを感じなくてその発言を受けとめていない。もし、そのどちらかができていて「女性からの注文を忘れていた」と思えたのならすぐに謝っていたはずだ。その一方で、安田さんは女性から注文を受けていないという「確信」を持ってはいない。その確信があれば「受けていませんが」などの応答ができたであろう。過去との持続が途切れている。その過去の時間が空白のままである。空白ができた過去の記憶を想起できないし、空白ができた部分の過去の出来事を人から聞いたとしても「パースペクティブ性」を持つことができない。瞬時瞬時をつなぐ持続の感覚が失われ過去の時間に空白ができ、それをどうしても埋めることができないため、安田さんの行為は立ち止まってしまう。この場合だとこの女性に対して応答のしようがないのである。現在の行為に有用な記憶を想起することができず、行為が停止してしまい行為に支障をきたしてしまう。つまり、自分がどのような行為をするべきなのか、あるいは目の前にいる人とどのように関

係していけばよいのかわからなくなってしまう。

このエピソードは、比較的短時間の過去の空白ができた例であったが、もし、その過去の空白が長期に及ぶ時は、自分の「物語の記憶」が途切れてしまうことになる。そのような時はアイデンティティも脅かされてしまうだろう。ここでは、時間の持続を感じられずに過去の一部分の時間が空白になってしまう事例を挙げたが、同様のエピソードは他のメンバーにもみられる。しかしながら、付け加えておきたいのは、受傷後年数が経っているメンバーにとって、このようなことがいつもおこることではなく「時折」であるということである。

## (2) 記憶の部分欠如

作業所のメンバーの場合、先述したように自分が過去において経験した出来事の記憶である過去記憶を想起できない訳ではない。しかしながら、やはり「時折」ではあるが、過去記憶の中の一つの出来事の一部が想起できないことがある。

ここでは人見さんのエピソードから記憶の「部分欠如」を示す事例を紹介する。

## エピソード2

### 《背景》

メンバーは全員たばこを吸うのだが、メンバーはたばこの箱についているロゴを集めてカメラが当選するキャンペーンに応募しようと、たばこを買ってはその空き箱をとっていた。私はメンバーから空き箱を受け取り、そこからロゴを切り取りとりまとめておく役割だった。もともとキャンペーンに応募するのが好きであった人見さんは、たばこを買ってきては私に箱をくれていた。そして、道に落ちていた箱を拾ってきてまでも私に箱をくれることがあった。1週間ほど私は作業所を休んだが、以下のエピソードは1週間後、私が作業所に行った時のものである。

### 《エピソード》

ちょうど12時をまわった頃だった。メンバーと私は昼食をとろうと作業所のテーブルに集まり、それぞれ持参してきたお弁当を出していた。

しかし、人見さんはお弁当を出したものの、先ほどから自分のカバンの中にある何かを一所懸命探していた。しばらくするとそれが見つかったらしく私たちに話し掛けてきた。「どなたかKOOLの



空き箱を集めていませんでしたか？」と言い、カバンの中からたばこの箱を取り出して私たちに見せた。それを見て高井さんが「青ちゃん（筆者注：私（筆者）のこと）が集めている」とすぐに答えた。すると人見さんは、私にたばこの箱を渡してくれた。

人見さんは、作業所でたばこの箱を集めていたことは想起できている。それがどの銘柄であったかも想起できた。だから、作業所にわざわざ家からたばこの箱を持ってきたのであろう。私がたばこの箱を集める役割をしており、過去に人見さんは何度も私に箱を渡してくれた。しかし、このエピソードにおいては、「誰が」それを集めていたかという行為の当事者にかかわる記憶を想起することはできなかった。つまり、あるたばこの箱についてあるロゴを集めてキャンペーンに応募するという行為、それを作業所で行なっているということは想起できたのだが、その箱を誰に渡せばいいのかが想起できなかった。一連の活動のうちある行為と行為者の関連づけができないでいる。

### エピソード3

#### 《背景》

私と人見さんは、作業所のその日の自分たちの作業を早く終了させ、他のメンバーの作業が終わるのを待っていた。私たちは、それぞれ昨日の出来事を話していた。

#### 《エピソード》

昨日、人見さんは父親と草刈りに出かけたと言ってくれた。私が「どこでやったの？」と聞くと、「どこでやったかな？」と目を細め首をかしげる。場所は思い出せないようだ。人見さんはその質問にはそれ以上答えず、「でも昨日、汗びっしょりになった。雨合羽をきていたからかな。」と言う。確かに昨日は蒸し暑く、雨が降ったりやんだりしていた。そして、人見さんは、「ずっと草を刈っていたから、指に水膨れ。」と言い、笑いながら私に水膨れができた手をみせてくれた。

人見さんは、自分が草刈りに行ったこと、その時の様子、そして草刈りをしたせいで手に水膨れができたことは想起できている。しかし、それをどこで行なったかという場所の記憶は想起できなかった。当時の自

分の行為、そしてその時の身体的感覚はありありと想起できるようであるが、どんな空間にいたのかという記憶が想起できないでいる。つまり、自分の経験した行為と行為の空間がまとまりのある一つのシーンとして想起できていない。

エピソード2と3は、エピソード1とは違い、過去の欠如、時間の持続の欠如はおきていない。しかしながら、過去の行為と行為者の関連づけができず（エピソード2において、誰に箱をあげるのか）、また、過去の行為を行なった場所（エピソード3において出来事の空間）の記憶が想起できずにいる。

### (3) いつどのような記憶を想起するのか

私たちは、行為する時には、記憶を想起し、意図や目的を達成しようとする。ベルクソンが言うように現在の行為に「有用な」記憶を想起しなければならないのである。つまり、私たちは記憶を想起しなければならないのは行為する現在の「瞬間」であり、想起するタイミング、そしてそこで何を想起するのが問題になるのである。例えば、問題を解決する時には、自分の記憶の中から何を想起すべきかが重要であり、なおかつ、それをタイミングよく想起しなければならない。問題解決に必要な記憶を想起できても、タイミングがずれ、かなり時間がたった時にそれを想起できたとしても、もはや意味をなさなくなってしまう。

次のエピソードは、問題が発生した時に高井さんが問題解決に有用な記憶をタイミングよく想起できなかった事例である。

### エピソード4

#### 《背景》

高井さんは、その明るい性格のせい友人の数も多く、作業所の中でもよく携帯電話で友人たちと話をしている。高井さんにとって携帯は必需品である。先日、私は、高井さんに携帯のメールの操作方法を教えた。それから少しずつであるが高井さんはメールができるようになっていった。それ以来、高井さんにとって私は携帯の「先生」になったみたいだった。わからないことがあるとすぐに私に質問をするようになった。この日のお昼、メンバーと私は昼食を食べていた。私の横には高井さんが座っていた。高井さんは私より一足先に昼を済ませると、自分の携帯を出して私に見

せようとした。

《エピソード》

高井さんは、私に「青ちゃん、携帯が壊れた。つながらなくなってしまったのさ。」と言い私に自分の携帯を見せる。なんとかして直して欲しいみたいだった。私は、「電池が切れたのじゃないの？」と言うと、高井さんは「昨日、充電したのだけれど朝になったら携帯がつかなくなった。」と困惑した顔で私を見る。私は携帯を受け取り、携帯のボタンをあこれいじってみたが、どこを押しても携帯の画面は暗いままである。私が「つかない」といって困り果てながら携帯をいじっていると、高井さんは前日使ったという充電器をポケットから出して私に見せてくれた。「僕、字が読めないから彼女に見せて読んでもらったのだけど、2時間以上充電をしたままだったらだめだと書いてあるって。充電したままずーとそのままにしてみましたさあ。」と高井さんは言う。私はその充電器を受け取り確かめてみた。確かに注意書きにはそのように書いてあった。私は充電を長時間したために携帯が故障したのだと了解した。故障なら私が携帯を直す事はできないので、高井さんと一緒に携帯電話のお店に行って修理してもらうことにした。(省略)

お店では高井さんから頼まれて私が店の人に事情を説明することになった。お店の人は携帯を調べてくれて意外なことを私たちに告げた。携帯は故障しておらず、単なる電池切れであり、携帯の付属品の充電器で充電し直すようにとのことだった。高井さんは、故障ではないことを聞いて安心したようであったが、私は釈然としなかった。なぜなら高井さんは「昨日、充電した」と言っていたからである。帰り道、私は先ほど高井さんから預かった充電器を返しながら「この充電器、コンビニで買ったものでしょ。2千円ぐらいするよね？」と何気なく言った。すると高井さんは「いや、900円ぐらい。」そして続けて「買った時、一回しか使えないと書いてあった。」と付け加えた。私はそれを聞いて「でも、昨日初めて使ったのでしょ？」と確認すると「いや、前に使ったことがある」と表情を変えないで言った。

この問題は、そもそも一回しか使えない充電器を高井さんが2回使ったために起きた。筆者は、このエピソードの最後でやっとそのことに気がついた。高井さんが、充電器は一度しか使えないこと、そしてすでにそれを一度使っているということを行為する時に想起

できればこの問題は起こらなかつたはずである。また、この日もこの記憶をすぐに想起できれば問題解決はもっと早くできたであろう。行為に有用な記憶を想起すること、そして、何らかの問題が発生した時には、その問題を解決するために必要な記憶をタイミングよく想起することが必要である。このエピソードでは、高井さんはこの2点がうまくできていない。したがって、問題を解決する行為に支障をきたすことになった。

このエピソードの最後に高井さんは、「いや、前にも使ったことがある」と言ったが、今回の問題を解決した後であったので今更それを思い出してもすでに遅い。一度しか使えない充電器をもう一度使ったのがこの問題の原因であるが、「前に使ったことがある」と想起する時の高井さんはこの一連のエピソードの原因と結果に気づいた感じはなかった。このエピソードに出てくる携帯に関する記憶（昨夜充電したこと、2時間以上充電をしたこと、充電器が一度しか使えないこと、充電器は一度使ったこと、この件に関して私に今まで話したこと）これらすべての記憶が一つのまとまった「携帯にまつわる一つの物語」になっていないように思われる。記憶を細切れの断片でしか想起できずに一つの物語を作ることはできていない。あるいは、時間の持続がとぎれているために、一つの物語にできないとも考えられる。いずれにせよ、記憶がばらばらの状態で自分の過去の経験を組織化ができていない。エピソードの最後で、自分が問題の原因を思い出しても驚かなかつたのはそのせいなのだろう。

(4) 未来記憶が想起できるようになるプロセス

未来記憶は現在という時間において未来を予想、予定し、未来に行なうことを意図する記憶であるが、未来記憶をメンバーがどのように想起できるようになるのか、その時間的な経過とともにプロセスを述べていく。作業所では、毎月さまざまな予定が計画され、メンバーはその活動に参加している。しかし、以下の事例のように何度もスタッフから予定を聞かされても未来記憶をうまく想起できない時がある。

エピソード5

《背景》

作業所でいつものように朝の会が行なわれた。

表2 メンバーが未来記憶を想起できるようになるプロセス

| 時間の経過               | 事象                                       | メンバーの行為・想起したこと                                     |
|---------------------|--|--|
| ある日の朝の会<br>(予定の2日前) | (スタッフ) メンバーに2日後にAセンターで行われるフォーラムに行く予定を伝える | メンバーは黙ってスタッフの言うことを聞いている                            |
| 翌日の昼<br>(予定の前日)     | (私) メンバーに明日午後の予定を確認する                    | メンバーは、「知らない」「聞いていない」と答える                           |
| (上記の)数時間後           | (スタッフ)「昨日、言ったでしょ」と驚くが、もう一度メンバーに明日の予定を伝える | 高井さんは、スタッフが翌日何時に出発したらよいかを話しているのを見て「明日、何かあるの?」と尋ねる  |
| 予定の当日<br>(出発の直前)    | (私) フォーラムがあることを教える                       | (作業所でフォーラムに行く準備が始まった) 高井さんは「Aセンターに何かあるのさ?」と私に聞いてくる |

(注) : ⇨ (矢印) は、行為の順番を示す

スタッフと人見さんと高井さんと私が出席した。スタッフは、ある日の朝の会で2日後にAセンターで行なわれるフォーラムにメンバーみんなで参加する予定であることを私たちに説明した。

《エピソード》

朝の会で、スタッフはこの日の出席者であるメンバーと私に2日後にAセンターで行われるフォーラムに作業所のメンバー全員で参加する予定があることを伝える。人見さんはフォーラムの日の夕方から別の予定が入っていたのだが、そのことを知っていたスタッフは、「フォーラムが終わってから、B(人見さんの行く予定になっている場所)に行けばいいね。」と人見さんに気を遣って言った。私は、メンバーの2人はそれを黙って聞いていたので予定を理解しているのだと思っていた。

翌日の昼、私は、人見さんと高井さんに明日の午後の予定についての話題をし始めると、2人は「知らない」、「聞いていない」と言う。この日の午後、作業所のテーブルのところでスタッフは、明日、フォーラムに行くためには何時に出発するのがいいか話合っていた。その側で作業をしていたメンバーと私たちはその話を聞いていた。するとスタッフの話が理解できなかった高井さんは「明日、何かあるの?」とスタッフに聞く。スタッフは「昨日言ったでしょ。」と驚いたように言ったが、もう一度、明日の予定を伝えた。

当日の昼、スタッフはフォーラムに行く準備をし始めた。高井さんは「今日、Aセンターで何かあるのさ」と私に尋ねてきた。

表2にエピソード5のメンバーが未来記憶を想起できるプロセスをまとめた。

メンバーが一つの予定の日時と場所、そして予定の内容を理解し想起できるようになるには、このエピソードのように時間がかかることがある。当日になるまで理解されないでいるためにスタッフが何度か説明を繰り返さなければならないことがある。

作業所では毎月スタッフにより多くの予定が生まれ、メンバーはそれに参加している。多くの場合、予定に関して繰り返し何度もスタッフがメンバーに言うことは少ないが、そうしなくても、メンバーは、ある程度その予定について理解しているように見える。当日、予定に遅れそうになったら、作業所に遅れる旨を電話してくることもある。また、プライベートの予定と作業所の予定が重なっていたら、自分のスケジュールを調整してわざわざ作業所にきたり、その逆に、その日は用事があるので、作業所の予定に参加できないとあらかじめスタッフに言う時もある。エピソード5も多くの場合と同じように、スタッフはメンバーが予定を理解していると思っていた。しかし、時折、このように理解されていないこともある。したがって、メンバーが予定を理解していることは確実ではないのであるが、どの予定がわかっていて、どれがわからないかは、スタッフがその都度メンバーに確認でもしなければ、わからないのかもしれない。今回は、メンバーが予定

を理解していないことをこの2日間に偶然にも明らかにされた場面があったので、メンバーにこの予定が理解されていないことがわかった。

この事例のようにメンバーが自分たちの予定を理解するには、何度か教えられなければならない時があるのは確かである。しかし、それがどの予定の時であるかはわからない。常にではなく、「時折」である。メンバーが予定について想起できない時は、予定があること自体忘れる時もある。また、予定が「何かあった」という予定の存在は想起できても、「その予定が何であったか」という予定の内容が想起できなかったり、あるいは、予定の行なわれる場所や時間がわからなくなってしまう時もある。メンバーが予定をわかっているかどうか、あるいはどのようにわかっているのかは、スタッフはもちろんのこと、メンバー自身も明確にできないことがある。このエピソードのようにメンバーが予定をわかっているのか、わかっていないのかがはっきりするのは、自分たちの予定に関するメンバーの発言を通して、あるいは、メンバーが予定をうまく想起できずその予定に参加できないようなトラブルが発生した時である。

## 2 作業所でスタッフとメンバーが行なっていること

メンバーは、記憶の障害を持ちながらも作業所においてスタッフやまわりの人とともに生活世界をつくり、現在を生きている。ここでは作業所においてメンバーとスタッフがそれぞれどのような行為をしているのかを述べていく。

### (1) 作業所でのスタッフの行為：スタッフの援助の仕方

作業所の活動は、メンバーに対するスタッフの細かい指示、援助のもとで活動が展開されている。メンバーが、その日どのような活動をするのか、あるいは、その活動の段取りから、進行、そして片づけまですべてを担うことはない。その日何をするのかは、メンバーの状況、そして、作業所の作業の進み具合、これからの予定を判断してスタッフが決めることが多い。ほとんどの場合は、スタッフがメンバーに「〇〇さん、何々してくれる？」というような質問とも依頼ともと

れる発言により、作業が開始される。メンバーは、自分に他の用事がない以外は、その発言に従っている。そして、多くの作業においてスタッフが常にメンバーと一緒にいて、一行程ずつ指示をする。メンバーも一行程が終れば、次の指示を待つ。自分から、次の工程に進めることはほとんどなく、次にどのような作業があるか把握していないことが多い。スタッフもはじめから、すべての行程を一度に説明し、指示することはしない。また、一行程の作業の終了時点においても、スタッフがそのつど終わりを確認する。このようにスタッフは常にメンバーの作業の様子に目を配り、適時、指示や支援をしていく。このような作業の進め方では、メンバーがその責任を負うこと、メンバーのせいでの失敗が起こることはないのである。スタッフは、「頭でわかっている、できない。同じことを何回もいわなくてはならない」と言う。スタッフがこのような援助をしている限りにおいては、メンバーの「できないこと」、「わからないこと」は見えないようになっている。

スタッフは、メンバーがどのようなことができないのか、どのようなことが不得意なのか、そして、何にこだわりがあるのかを、概ね理解している。作業所においてスタッフが、メンバーに何か作業を依頼する時、メンバーのその日の体調はもちろんのこと、メンバーが「できる」作業、あるいは、「できるであろう」、「してくれそう」と予想した作業しか依頼しない。

このことは、メンバーが「できないであろう」、あるいは「苦手であろう」作業はメンバーにさせないようにすることと同義であるが、どうしてもそのような作業をさせざるをえない時は、何らかの支援をし、それがうまくいくように心配りをしている。

## エピソード6

### 《背景》

作業所は商店街のお祭りの時に屋台を出店した。メンバーは売り子をしていてお揃いのエプロンをするようになっていたが、人見さんだけエプロンをしていなかった。スタッフが人見さんにエプロンをどうしたのかと尋ねると人見さんは、作業所に忘れてきたと言う。私は、2人の横でこの話を聞いていた。私は作業所の長いすの上に誰のものかわからないエプロンがおいてあったのを思い出し、2人に教えた。スタッフは、私が教えたエプロンがある場所をもう一度、人見さんに説明し

た。人見さんは、それを聞いてすぐに作業所にエプロンをとりに行った。

#### 《エピソード》

人見さんは、なかなか戻ってこなかった。私は少々心配になり、スタッフに「人見さん、わかったかな？」とスタッフに言う、「さっき、人見君が作業所に取りに行ってから、作業所にいるボランティアさんに人見さんが長いすの上にあるエプロンを取りに行くからよろしくねと電話しておいたから、多分、わかると思うんだ。」と笑ってスタッフは言う。それからまもなく、人見さんがニコニコしながらエプロンを手にして戻ってきた。

スタッフは、人見さんがエプロンの場所を聞いて作業所にとりに帰っても作業所の中でエプロンを見つけるのは難しいと判断したのだろう。スタッフは、作業所に残っていたボランティアに事情を説明し人見さんが作業所に着いても困らないように段取りをしている。このようにメンバーが「できないであろう」、「苦手であろう」と予測されることはメンバー一人できせることはない。スタッフは、「いつものこと、慣れたことは一人でもできるが、新しいこと、何か今までとちがうことが発生したら一人では無理」とメンバーのことを言う。メンバーが「できない」「わからない」と感じ作業所では困難さを抱える場面は見ることはほとんどない。

上記以外の方法でもスタッフは、メンバーが遭遇しそうなトラブルを回避する。スタッフは、メンバーが忘れること、間違ふことがあっても、特にそのことについては指摘せず、そのままにして「気づかないふり」、「聞かなかったふり」をすることがある。それが、今後のメンバーの行為に支障を与えるような恐れがあれば、直接そのことを指摘することもあるが、特にそのような恐れがない時、あるいは、その間違いをスタッフが引き受けることができる時には、指摘しないでそのままにしている。スタッフは、メンバーに自分が「忘れた」ということ、「間違っている」ということをあえて自覚させないようにしているようだ。

しかし、今までの「医学モデル」によるリハビリテーションの現場では、この作業所での実践とはまったく逆の対応を行っているとも言える。例えば、「社会適応モデル」（加藤，2001）に沿ったリハビリテーションプログラムでは、認知行動障害があるのにそれが

表面化していないのならば、本人に認知行動障害を自覚させようとする。すなわち問題や失敗が生じたその場で事実を当事者に示し、その場で認識のズレを指摘することが行なわれる。障害と結果の因果関係に説明を加えて、当事者に障害の認識を深めさせようとする。そしてその都度、行動の修正を指示し、有効な行動を示唆していく。その結果、当事者が障害を自覚するようになってきたら、当事者と援助者がそれを補う手段（補償行動）を考え、環境調整を行なっていく。このようなアプローチを通して、当事者に障害を気づかせ、自覚化させていくということが行なわれている。

この作業所と上記のようなリハビリテーションの場での失敗や「できない」ことに対する対処の仕方の違い、つまり、前者は当事者が失敗や「できない」ことをすることを避け、もし「できない」ことが発生しても、それを自覚化させないのに対し、後者は、「できない」ことを明らかにし、本人に自覚化をさせるという対処の違いは明らかである。

医学モデルによるリハビリテーションは、障害を訓練や治療によって軽減し、障害者個人の努力で超えられない問題は環境調整をして社会適応を目指す。したがって、上記のような障害を顕在化するアプローチは障害者が自分の障害を認識することでリハビリテーションへの動機づけや代償手段の習得が促進され能力障害を可能な限り軽減していく可能性がある。しかし、作業所のメンバーは今まで何度かリハビリテーションや就労支援を受けたりした経験があるがその成果を能力障害の軽減に結びつけることが難しく就労などの新しい社会環境への参加は困難であった。この作業所では直接、能力障害の軽減を目標にされることはないが、作業所という場において残存する能力を使いながら人々と関係を築き、メンバーの特性を理解したスタッフの支援と環境調整のもと生活のしづらさの改善を目指すアプローチを行なっている。医学モデルによるリハビリテーションは能力障害を軽減し障害者が健常者に近づくこと（要田，2004）で社会適応することを目指すとするが、この作業所は個人がもつ能力障害はそのままでもメンバーにとって適切な社会的環境を作り出すことで能力障害をカバーし社会参加することを目指している。このような方向性があってもよいのではないだろうか。

この作業所ではスタッフは、メンバーが苦手であること、「できない」こと、「わからない」ことを作業所で可視化することを避け、それらを補う形で支援を行なっている。したがって、メンバーの障害は見えなくなっている。スタッフのこの援助行為は、メンバーの記憶の役割を担っていると言えるのではないだろうか。メンバーは行為する時に有用な記憶を想起しなければならないのだが、メンバーは時折、行為に有用な記憶を想起できないことがある。これをスタッフが「支援」というかたちで代行している。メンバーの記憶はスタッフに分かちもたれている。

## (2) メンバーは記憶障害を持ちながらどのように行為をするのか

作業所では、メンバーが何かわからないことがあっても、メンバー自ら「わからない」と言うこと、あるいは、「それは何か」などという質問が出されることはほとんどない。メンバーが仮に何かわからないことがあったとしても、メンバーは、会話において応答が適切であったり、話題を自然に変えたりするので「わからない」ことを曖昧にしてしまうことがある。しかし、会話の文脈が適切であっても、メンバーの様子や、その後の言動から、私たちは、メンバーが、本当にわかっていたのかどうか疑問を持ってしまうことがある。

## エピソード7

### 《背景》

これは私がはじめて作業所を訪問した日のことである。私がスタッフと話をしていると、玄関から人見さんが入ってきた。人見さんは私が以前フィールドとしていた作業所のメンバーで2年ぶりの再会だった。人見さんはそこで何度も会っていた人であった。人見さんがこの作業所にいるとは知らなかったのでも驚いた。

### 《エピソード》

「あ、こんにちは。」と私は人見さんと久しぶりに思いがけないところで会ったために驚きながら挨拶をした。人見さんは、私の方を見て、表情も変えずに黙って頭を下げた。私の隣りにいたスタッフが「青木さん、知っている？」と人見さんに尋ねた。人見さんは、「はい。」と短く答えるが表情は変わらない。スタッフが、「青木さんと、〇〇（別の作業所の名）で会ったことあったでしょ

う？」と言うと、人見さんは、同じく「はい。」としか答えない。私は「久しぶりだね。」と笑顔で言うが人見さんの表情が変わることなく「はい。」と言うだけだった。

このエピソードでの人見さんの応答の様子からは筆者のことを覚えていたかどうかははっきりしない。人見さんの反応の「はい」という応答だけを取り上げると、筆者のことを覚えていたように思われるが、人見さんの表情や声のトーンに注目すると筆者のことを覚えていないとしか判断できない。この後、筆者が前の作業所での人見さんとの思い出話をしたが、それを聞いている人見さんの様子からは、懐かしむ様子、筆者の話と共有している感じは受け取ることができなかった。これ以降も、人見さんは、急に前の作業所のことを話題に出すことはあるが、一度もその中で「私」が出てくることはない。人見さんが過去の話をする時は、特定の人物とのエピソードを話題に出すことはほとんどない。どこにあったかという場所の記憶や、「私は〇〇に行っていました」という個人的ではあるが特定の出来事ではない記憶を語ることが多い。以上のことから推測すると、人見さんは、前の作業所で筆者と会ったことは覚えていないように思えるのだが、しかし、人見さんの「はい」という応答がある限り、それが曖昧になってしまう。この他、人見さんと思い出を共有できるはずの特定の出来事を話すことがあるが、多くの場合、「覚えていない」、「わからない」などと人見さんが言う事はない。その代わりに、上記のエピソードのように人見さんの応答が「はい」だけで済ますことが多い。また、人見さんからは、筆者の話に話題が追加されるようなことはない。まれに、筆者が「覚えている？」と確認しても、「はい」というだけである。

ある時、人見さんに過去の出来事に関してこのような「はい」か「いいえ」で答えられるようなクローズドクエスチョンではなく、オープンクエスチョンで質問をしたことがあった。人見さんは、その頃病院のリハビリの先生から言われて週に一回の割合で、家で夕飯を作っていたのだが、筆者が「先週は、何を作ったの？」と質問すると、人見さんは、少し考えたもののそれには答えず、この日、夕飯に何をやる予定であるかという話題に自分から話を切り替えてしまった。このように話題にした出来事人見さんは覚えているの

か覚えていないのか話し手はよくわからないのだが、人見さんが別の話に切り替えてしまうので曖昧のままになってしまう。他のメンバーも何か質問を受けても、その質問に対して答えなくて、話題を急に切り替えてその質問の答えがわかっているのかわかっていないのか曖昧のままにしておくことがある。このことはあるメンバーから「わからなくなるとそうする」とある時教えてもらった。

また、安田さんの場合は、母親の話によると、何を覚えていて何を覚えていないのかは、会話の中ではわかりにくいと言う。ある時、中学の時の同級生が何年かぶりに安田さんの自宅に遊びにきたことがあった。安田さんは、この時、楽しみにその友人と2時間近く家で話していたそうである。しかし、友人が帰ったあと、それまで楽しそうにしていた安田さんは、先ほどまでの様子と違い、大変疲れ果てていたと言う。どうしたのかとその理由を母親が聞いたところ、安田さんは、その友人のことは覚えているが、その友人と過去にどのように過ごしていたのか、どのような出来事があったのかは覚えておらず、楽しみに振る舞いながらその友達の話に調子をあわせていたと言う。一方的に、相手の話に合わせて2時間近く振る舞っていたので気を遣いすぎて疲れたということであった。安田さんも、覚えていない事があったとしても、自分から「忘れた」「覚えていない」とは言わない。それどころか、相手の話に合わせてしようとするし、相手の話を拾いながら話すことが上手く相手にわからないことを気づかれる事はない。言いかえれば、非常に応答性が高いとも言える。したがって、安田さんが何を覚えていて何を思い出せないのかは、会話の中ではわからないといつも一緒にいる母親は言う。

人見さんは、「僕は、今までわかったふり、できるふりをしていました」と作業所において、メンバーやスタッフの前で今までに何回か言ったことがある。私たちが、気がつかないことのほかにも、上記のようにわからないことやできない事も、「ふり」をすることで、曖昧にしてきたことがあるのだろう。しかし、日常のコミュニケーションにおいて、発話に対し適切に応答していたら、それが「ふり」であっても、他者がそれを見破るのは難しいことがある。

なぜ、メンバーは他者との関係において、自分は何

が「わかっていて」何が「わかっていないのか」を明らかにしようとしないのであるか？ なぜ、このように自分の認識を他者に対して曖昧にするのだろうか？

それは、メンバーが、他者との関係において適切とされている振る舞い方をしようとするからである。石川(1999)は、私たちは、社会において「適切性」にこだわっていると指摘する。私たちは、このように「振る舞うべき」という礼儀作法、ルール、規範からずれがないように、参加している集団、社会、文化、コミュニティで適切とされている振る舞い方をしている。私たちはなぜ、適切性にこだわるのかということ、そのように振る舞うことにより、出来事の進行は予想できるようになり、物事がスムーズに流れていくことが担保されるからである。さらには、適切に振る舞うことにより、自分が参加している社会の中で自分が正しく振る舞うことができる人間だと証明することができる。私たちは、他者から与えられる「自分に対する評価」に強いこだわりを持っている。私たちには、他者のまなざし、あるいは社会のまなざしというものへの意識や自覚が非常に強くあって、それが私たちの行動の仕方に大きな影響を与えている。これはメンバーにとっても同様である。したがって、出来事をスムーズに進行させ、その中で適切に振る舞うためには、他者と共有していたはずの過去の時間を一方的に「忘れた」「わからない」とは、なかなか言えないのである。なぜなら、過去の時間を共有していた他者が自分のことを覚えている限り、自分もその過去を覚えているはずだという予期を他者が持っていることをメンバーはよく知っている。また、会話の途中で「わからない」と言うことによって、その会話の流れが一度止まってしまうことも知っている。そしてそのことは、自分が「わかっていない」ということを他者に明示することにもなる。すなわち、自分が障害を持つことを可視化することにつながり、それに対して他者から自分に何らかの評価が与えられることがあるとメンバーは知っている。矛盾するようであるが、メンバーは、高次脳機能障害者の作業所に来ながら高次脳機能障害があるということを隠蔽しているのだ。

メンバーの「わかったふり」、「話を切り替えわからないことに直面するのをさける」という行為が続けられる場合、現在行なわれている活動において何がわか

っているのか、何がわかっていないのかを曖昧に  
しまい、なんらかの支障を後の「未来」に生み出すの  
ではないだろうか。

## エピソード 8

### 《背景》

メンバー、ボランティアとこの日のスタッフで  
ある高井さんの母親と私は、商店街のお祭りの時  
に作業所が出店する屋台に飾る POP をどのように  
作るかと話し合っていた。「POP とは何か」につい  
てはボランティアがこの話し合いの前に詳しく私  
たちに説明をしてくれていた。私たちはわからない  
点は質問をし「POP とは何か」を理解しようと  
していた。その後、だれも質問をしなくなったの  
でそれぞれ説明を理解しているものだと私は思っ  
ていた。

### 《エピソード》

ボランティアが高井さんに「POP 書いてね。」と  
言う。それを横で聞いていた人見さんが「天然物  
のホタテとか書いて、あと何々は何百円とか…  
…」と身振りを交えておもしろおかしくどのよう  
に書けばいいのかアイデアを言う。まわりの人  
は人見さんを見て笑って聞いていた。ボランティ  
アが高井さんに「書いてね。」ともう一度言うと、  
今までみんなと笑っていた高井さんは「え？」と  
いう表情をした。高井さんの母親（スタッフ）は  
「わかってないわ、この子」と言う。高井さんは  
「お店の前にたって、いらっしやい、いらっしや  
いとすの？」と母親に聞く。「そうでなくて…  
…」と母親は高井さんに POP とは何かをもう一度  
説明をする。

高井さんも私達と一緒に説明を聞いていた。そして、  
人見さんが POP のアイデアを発表した時も私たち  
と一緒に笑いながら聞いた。しかし、このあと自分が  
POP 作りを依頼され、自分がそれを実行せざるをえな  
くなって、はじめて高井さんは「POP とは何か」がわ  
からないことを明らかにしなければならなくなった。  
このように現在の場面で話が「わかった」ふりをして  
も、その後、話がわからないことを明らかにしなければ  
いけない場面に出会うことがある。自分が行為の主  
体者となる時に「わからない」ことを表明せざるをえ  
ないのである。通常、メンバーと周りの人との相互行  
為はスムーズにいつているため、メンバーは何が「わ  
かっているのか」、「わかっていないのか」をますます

曖昧なままにしてしまう。しかし、メンバーは「わか  
ったふり」をしたことを明らかにしなければならない  
場面にこのように直面することがある。

作業所でのメンバーの「わかったふり」、「話を切り  
替えわからないことに直面するのをさける」という行  
為は、メンバーと周りの人との相互行為をスムーズに  
するが、一方で、自分自身の障害を「見えにくく」さ  
せている。

## まとめ

### 1 メンバーの記憶障害はどのように経験されてい くのか

本論文では、記憶をベルクソンの記憶論をもとに考  
えてきた。私たちは行為する現在においてその行為に  
有用な記憶を想起し行為を行なう。そして、私たちが  
時間の持続を感じられるのは現在において過去記憶や  
未来記憶を想起できるからである。この記憶観をふま  
え、メンバーが行為する時にどのように記憶を想起し  
行為をしているのかを分析し、記憶障害がどのように  
現れているのかを見てきた。メンバーは、行為する時  
に有用な記憶を想起できないことがあり、それが記憶  
障害の経験となっていた。メンバーの記憶障害の特徴  
をまとめると次のようになる。メンバーは過去のある  
時間の記憶が想起できなくなることがあること、記憶  
を想起できてもその一部が欠落してしまうこと、行為  
に必要な記憶をタイミングよくまとまりのあるものと  
して想起できないこと、記憶を想起できるようになる  
のに時間がかかることがあることなどである。これら  
の記憶障害が現れた時、メンバーは自分が今何をすべ  
きなかがわからなくなったり、出来事の構造となる  
行為の行為者、場所、行為の内容、例えば、「誰が」、  
「どこで」、「何をする」などの一部が想起できないた  
めに結局は行為が滞ってしまったり、また、現在と過  
去または未来とのつながりが断続的なものとなってい  
た。

メンバーは記憶障害を持ってはいるが、日常生活に  
おいて多くのことを思い出せない、わからないわけで



はない。現在において過去そして未来のすべてがわからないのではなく、それらの時間の一部分、あるいは一つの事柄の一部分が想起できないことがある。さらには、それはいつもではなく「時折」である。それがメンバーに記憶障害として経験されるのは、現在の行為に有用な記憶を想起できず行為に支障がでる時である。

メンバーは、スタッフのこまやかな指示や、メンバーの持っている力を理解したうえでの支援のもとで作業所の活動に参加し、行為をしている。スタッフ主導で行なわれている作業所の活動においては、メンバーの「できないこと」、「わからないこと」が私たちには見えにくくなる。つまり、メンバーの障害が見えにくくなるのである。しかし、障害を見えにくくしているのは、スタッフだけではない。メンバー自身も作業所において、わからないことがあっても「わかったふり」をしたり、「話を切り替え、わからないことに直面するのをさける」ことによって自分の障害を他者に見えにくくしているのである。これは、メンバーとスタッフが共に生み出した、障害を「見えなく」するための作業所の活動システムである。このシステムがある限り、私たちにとって、メンバーの記憶障害は見えにくくなる。したがって、私たちにメンバーの障害が見える場合の多くは、メンバーの行為が作業所の障害を見えなくする「システム」外の文脈でおこり、スタッフの支援が届かないところ、メンバーも「わかったふり」などできないような場面であり、メンバーが行為の主体者として有用な記憶を想起することができないまま行為しなければならなくなった時である。

## 2 記憶障害を持って人と共に生きること

現代社会では、ノーマライゼーションの思想のもと、障害を持つ人も持たない人も社会の中で共に生きることが目指されている。共に生きることは、隔離、排除、差別などのない状態で「同時代に同じ地域で共にいけること」(館, 2005)と定義されるが、要田(1999)が主張するように健常者が「障害者と共に生きる」という視点ばかりではなく、障害者の側から「健常者と共に生きる」という視点も含まれるべきである。それは障害者、健常者相互において対等に人間としての尊

厳を持って生きることを意味する。また、そこでは障害をどのように捉えるのか、そして、お互いにどのような関係を築いて生きていくのかが問われることになる。本研究では作業所という場、高次脳機能障害の記憶障害を通してこれらのことを考察してきた。

高次脳機能障害はその障害が外見からわかりにくいので「見えない」障害という意味だけでなく、当事者、そしてそれを援助する人との関係によっても高次脳機能障害が「見えない」障害になる。

先述した作業所の「システム」が一つの例になる。作業所では、スタッフはメンバーが苦手であること、「できない」こと、「わからない」こと、そして持っている能力や活動可能性を理解し、メンバーひとりひとりに合わせた細かな支援を行なっている。メンバーはその支援のもと作業所の活動に参加する。また、作業所においてスタッフは、メンバーに「覚えている?」、「わからないの?」などと問うことはほとんどなく、メンバーの障害を可視化するのをできるだけ避けていた。また、メンバーも話の中や活動の中でわからないことがあっても「わかったふり」や「話を切り替え、わからないことを避ける」ことによって、自分の障害を可視化させることを避ける行為を作業所で行なっていた。しかし、それは「適切性」(石川, 1999)にこだわるといふ側面だけでなく、「人とうまくコミュニケーションするため」という意味合いもあるのではないかと。このコミュニケーションの基本的な条件となるのが役割取得である。片桐(2003)はG.H.ミードの相互行為論をふまえて役割取得を次のように定義している。役割取得とは、自己の行動が他者にどのような反応を引き起こすかを前もって予期し、そのことによって自己の行動を調整していく過程であると言う。そのような予期は他者の態度を取得することによって可能となる。この役割取得が、コミュニケーションを支えるものとなり、それによって相互行為が生じていく。メンバーは記憶障害を持っていても出来事やものごとの全てを忘れてはいるわけではなく、ある程度覚えているはずだと他者から思われていることを知っている。そしてメンバーは自分に「わからないこと」があっても、明らかにせず、それを曖昧にしていた方がコミュニケーションはうまくいくことを知っている。メンバーは他者の視点から自分を見てその位置

から行為するという役割取得をして相互行為の文脈にふさわしい行為をとっているのである。それによって人とうまくコミュニケーションをとろうとしている。ここにメンバーが「健常者と共に生きる」時に人とのような関係を築き、どのような自分で生きていきたいかの思いがこめられているように思う。そして作業所では、このメンバーの思いを受け、メンバーの「わからないこと」を支援という形をとりスタッフが埋めていく。このスタッフとメンバーが作り出した作業所の「システム」の中では、高次脳機能障害は「見えない」障害となるのである。

この「システム」はどのような意味を持っているだろうか？ この作業所の「システム」を近年採択された WHO の国際生活機能分類 (ICF) (2002) のモデルにあてはめて考えてみる。ICF では、障害は機能障害、活動制限、参加制限の3次元から成るものとする。また、背景因子として環境因子と個人因子があり、この3つの次元と相互作用をもつものとして明記された。この作業所ではスタッフの支援の仕方は ICF のモデルの環境因子に、そして、わからないことがあっても「わかっているふりをする」というメンバーの対処方法を個人因子にあてはめることができる。この二つの背景因子の影響によって、メンバーの活動制限がとれ、作業所の活動への参加が促され、メンバーは作業所という場において「生活のしづらさ」から開放されたことになる。

浜田 (2003) は、次のように言う。人は自分では選べない生の条件があり、その条件を背負いながら、自分なりの〈生きるかたち〉をつくりあげていくものである。障害も多くの場合、自分では選べない生の条件であり、障害を引き受けて〈生きるかたち〉を作り上げることが大事である。そして、人は人とともに生きざるをえないのだから、〈生きるかたち〉を〈ともに生きるかたち〉として作り上げていくことが必要とされる。障害を考える時、私達にとって問題となるのは、人が自分の生の条件を見定めること、そして周囲の人やものとの間で取り結ぶ関係世界の中でともに〈生きるかたち〉をどのように作り上げていくのか、そしてその上で選べる世界を関係世界の中でどのように立ち上げていくのかを考えていくことが大切であると主張する。

私たちは、いままで障害は「克服」すべきものであり、いかに障害を軽減するかに目を向けてきた。しかし、日常生活の場に目を向け、障害を持っている人が、今ある力を使ってどのように生きているのかその〈生きるかたち〉を見ていくこと、そして、まわりの人とのような関係世界に生きているのかを明らかにすることは、その障害を理解するためにも必要な作業である。また、人が生きることに際して「支援する - 支援を受ける」ことの意味と役割について新たな視点を提示できる可能性がそこにあると考える。

## 引用文献

- 朝日新聞. (2005, 7月18日). 高次脳機能障害, 初の診断基準策定へ 障害者認定を促進. *asahi.com*, <http://www.asahi.com/health/news/TKY200507170381.html> (情報取得 2005/10/08)
- Bergson, H. (1999a). 記憶と生 (前田英樹, 訳). Deleuze, G. (編). 東京: 未知谷. (Bergson, H. (1975). *Mémoire et vie, textes choisis par Deleuze, G.* Paris: Presses Universitaires de France.)
- Bergson, H. (1999b). 物質と記憶 (田島節夫, 訳). 東京: 白水社. (Bergson, H. (1896). *Matière et mémoire.* Paris: Presses Universitaires de France.)
- 浜田寿美男. (2003). 人が人と〈ともに生きるかたち〉. 山上雅子・浜田寿美男 (編), ひととひとをつなぐもの (pp.231-262). 京都: ミネルヴァ書房.
- 浜田寿美男. (2002). 身体から表象へ. 京都: ミネルヴァ書房.
- 生駒一憲. (2004). 外傷性脳損傷のリハビリテーション. リハビリテーション医学, 41, 409-412.
- 生駒一憲. (2005). 脳外傷による高次脳機能障害とリハビリテーション. 北海道脳外傷リハビリテーション講習会実行委員会.
- 石川准. (1999). 人はなぜ認められたいのか——アイデンティティ依存の社会学. 東京: 旬報社.
- 片桐雅隆. (2003). 過去と記憶の社会学——自己論からの展開. 京都: 世界思想社.
- 加藤朗. (2001). 外傷性脳損傷者の職業生活を支援するサービス. 日本職業リハビリテーション学会近畿ブロック研究会 (編), 近畿の高次脳機能障害支援最前線——公開セミナー「高次脳機能障害の社会的支援」報告集 (pp.3-32). 大阪: 日本職業リハビリテーション学会近畿ブロック研究会.
- 国立身体障害者リハビリテーションセンター. (2004). 高次脳機能障害者支援モデル事業報告書.

- 前島伸一郎・上好昭高・坊岡進一・國本健・吉本宗人・石田和也・松本朋子. (2002). 記憶障害とリハビリテーション. 総合リハビリテーション, 30, 307-312.
- 眞野行生. (2003). 頭部外傷による高次脳機能障害について. 北海道高次脳機能障害連絡調整委員会(編), 高次脳機能障害者社会復帰支援モデル事業における関係施設の取り組み (pp.1-4). 北海道.
- 森敏昭. (1999). 記憶. 中島義明ら(編), 心理学辞典 (p.150). 東京: 有斐閣.
- 森敏昭. (2001). 記憶研究のパースペクティブ. 森敏昭(編), おもしろ記憶のラボラトリー (pp.1-14). 京都: 北大路書房
- 大橋靖史. (2004). 行為としての時間——生成の心理学へ. 東京: 新曜社.
- 大村純. (2004). グループホーム・作業所における生活支援. OTジャーナル, 38, 754-757.
- 障害者福祉研究会(編). (2002). ICF 国際生活機能分類——国際障害分類改定版. 東京: 中央法規出版.
- 館暁夫. (2005). 障害をもつ人々と共生できる社会. 教育と医学, 53, 82-89.
- 上農正剛. (2003). たったひとりのクレオール——聴覚障害児教育における言語論と障害認識. 東京: ポット出版.
- Vygotsky, L. S. (1982). 子どもの欠陥性の心理学と教育学について. ヴィゴツキー障害児発達論集 (pp.9-50). (大井清吉・菅田洋一郎, 監訳). 東京: ぶどう社. (Лев Семенович Выготский (1924). К психологии и педагогике детской дефективности. Вопросы воспитания слепых, глухонемых и умственно отсталых детей (pp.5-30). М., изд. СПОН НКП.)
- Wertsch, J. V. (2002). 行為としての心 (佐藤公治・田島信元・黒須俊夫・石橋由美・上村佳世子, 訳). 京都: 北大路書房. (Wertsch, J. V. (1998). *Mind as action*. Oxford University Press.)
- やまだようこ. (1987). ことばの前のことば. 東京: 新曜社.
- 山鳥重・鎌倉矩子. (2005). 生活の中の認知障害. 神経心理学, 21, 74.
- 矢崎章・三村将. (2005). 高次脳機能障害に対する認知リハビリテーション. 精神認知とOT, 2, 189-194.
- 要田洋江. (1999). 障害者差別の社会学. 東京: 岩波書店.
- 要田洋江. (2004). 障害をもつ人を排除しない地域社会の条件. 大沢真理・森田朗・大西隆・植田和弘・神野直彦・荻谷剛彦(編), ユニバーサル・サービスのデザイン (pp.103-140). 東京: 有斐閣.

(2005.3.31 受稿, 2006.1.31 受理)